

図表 5-4 昭和40年代（1965～1974）の肝炎の予後に関する主な報告

文献番号	年	出所	内容	文献の種類	文献の性質	予後の重篤性
5-4-1	1965 (S40)	Senior JR. Post-transfusion hepatitis.. <i>Gastroenterology</i> ; 49(3); 315-320	世界中で、年に30,000例の輸血後肝炎感染者が発生していると推定されていること、入院している輸血後肝炎感染者の10~12%が死に至ること、最終的に治癒するとしても多くの患者に重篤な症状が見られることなどを記載。	他	原	●
5-4-2	1966 (S41)	平山千里(九州大学医学部第3内科)「経過と転帰」九州大学血清肝炎研究班『血清肝炎の実体と対策』金原出版株式会社. 1966. p.64-77	本邦における輸血後肝炎の死亡率は2%から5%で比較的変動が少なく、累計してみると、468例中15例(3.2%)で、予想されるほど高率ではなかった旨を報告	他	レ	○
5-4-3	1967 (S42)	上野幸久(自衛隊中央病院内科),芳賀稔「慢性肝炎の予後」臨床と研究 1967;44(9); 36-42	著者らが数年前から取った統計によれば、血清肝炎の30.2%が慢性肝炎に進展すること、活動性慢性肝炎について観察を行ったところ、一方的に進行して肝硬変に進展するものは極一部であり、多くは、形態学的には肝硬変に近い変化が続き、明らかな肝機能異常が長く続いているにもかかわらず、容易には肝硬変には進展しないこと、肝臓を専門とする諸家の多くの見解は慢性肝炎は極めて治り難い病気であるということになっているが、著者らの成績によれば慢性肝炎からの肝硬変進展率は7.8%であり、多くは一進一退しながら同じような状態を続けるか、漸次炎症が治まってきて、むしろ非活動性慢性肝炎か肝線維症といった状態になっていくこと、そのため医師の適切な指導と治療、および患者の協力があれば社会復帰が可能であることを述べる。	他	レ	○
5-4-4	1968 (S43)	上野幸久(自衛隊中央病院,三宿病院内科),芳賀稔「ウイルス性肝炎の予後とアフターケア」モダンメディア 1968;14(2); 624-632	従来ウイルス性肝炎は良性の疾患とみなされ、そのほとんどが2か月から3か月以内に全治すると考えられていたが、近年、肝機能検査の進歩と肝生検の普及によって、ウイルス性肝炎の中には経過が蔓延化し、慢性化し、さらには肝硬変へと進むものがかなりの率に上がることが明らかにされてきたこと、治癒率については流行性肝炎が85%、血清肝炎が80%をやや下回ること、致命率は流行性肝炎が2.7%、血清肝炎が4.1%であること、および慢性肝炎は肝硬変の前段階であるが、慢性肝炎のすべてが肝硬変になるのではなく、大多数は多少の弛張性を示しつつ、漸次病状が好転し門脈域の線維化という軽い病変を残すことはあっても、ほとんど治癒という状態まで達することなどを記載	他	レ	△
5-4-5	1969 (S44)	志方俊夫(東京大学医学部)「血清肝炎の病理学的研究 特にその遷延化と肝線維症について」昭和43年度厚生省医療研究助成補助金『血清肝炎の予防ならびに蔓延化防止に関する研究』 1969. p.54	血清肝炎が遷延化すれば、伝染性肝炎と同様に慢性肝炎を経て肝硬変症あるいは肝線維症を起こすことは明らかであること、このような遷延化し肝硬変症まで進展していく症例に関しては、最近の進歩した肝機能検査及び肝生検により臨床的にまた肝機能検査によっても全く血清肝炎が治癒したと思われた症例が、数年あるいは十数年たって血清肝炎の後遺症ともいべき状態に陥ることであることが記載されている。	厚	レ	△